

團伊玖磨氏談話記録

「回想・祖父團琢磨のことなど」

平成一〇年九月、筆者（由井常彦）が編集した「実業家伝記集成」（復刻版）第一巻として「男爵團琢磨伝」（二冊本）が、ゆまに書房から刊行された。翌平成一一年秋、ゆまに書房の上條雅通（編集部長）氏・吉田えり子氏と筆者が、「男爵團琢磨伝」の贈呈を兼ねて、團伊玖磨氏を綱町三井倶楽部にご招待、会食した際、團氏が祖父團琢磨氏などについて回想された談話を、ほぼ再現、談話録としてとりまとめたものが、ここに掲載する「回想・祖父團琢磨のことなど」である。

この時、團氏はご子息の紀彦氏、御妹の西尾桂子氏と御一緒に出席、祖父の思い出を中心に歓談された。筆者の依頼に応じて、翌平成一二年春に三井文庫を訪問し、正式に祖父の回想談をなさって下さると約束された。だが平成一二年四月には奥様が急逝されるという御不幸に会われた。また六月からは、氏の全作曲を演奏、氏自身が指揮する「DAN YEAR 2000」のコンサートが毎月二回開催されるスケジュールとなっておられたため、こちらも御遠慮し、三井文庫への御来訪は実現しなかった。

そして本年三月二〇日、九州の大牟田市で「團琢磨展―大牟田三池築港百年記念―」が開催の運びとなり、團伊玖磨氏が記念講演をなさることとなったので、ここで当日筆者は團伊玖磨氏にお会いする機会をえた。もつともこの時には、二、三週間ほど前に心臓発作で体調を崩された由で、出席が危ぶまれたが、当日朝無事に展示会の開会式（於・大牟田

市石炭産業科学館）に出席された。三池炭鉱跡などの見学は省略されたが、三池港倶楽部での昼食会は御一緒することができ、同夜の氏の講演もとどこおりなく済まされた。前回とは違って、口数も少なく、健康に配慮されてはおられたものの、外見はそれほど弱られている様子が見受けられなかった。そこで重ねて三井文庫へのご来訪をお願い申し上げた。秘書の佐藤静恵さんも、次回は、と確約して下さい。

こうして間もなく回顧談話が正式にうかがえるものと思っていた矢先、五月一七日、出張先の中国・蘇州にて、心臓発作で全く思いがけなく急逝された。

このようなわけで、正式な談話は、聴取できないままに終わった。まことに残念な結果となったのであるが、しかし落ちついて考えてみると、一昨年お会いした時に祖父團琢磨の想い出話はひととおりなさっておられたので、忘れぬうちにできるだけ当日の同席者がお聞きしたことを思い出し、再現してみることがさしあたり必要と感じた。また、團伊玖磨氏は作曲家であるとともに、随筆家・文筆家としても著名でおられ、事実この日のお話も、座談といえ、筋道がおっており、すでに質問を予期した内容であることに気がついた。そして正式な談話を承っても、それほど内容や有用性に大差はないのではないか、と思うようになった。

こうした経緯で、筆者の記憶を中心に、当日のお話を文章に起こし、團紀彦氏や吉田えり子氏ら同席者に十分に確認していただき、さらに補足や訂正を加えて、回顧談話としてとりまとめたのが、本稿である。もとより言葉遣いについては厳密に再現することはできなかつたものの、内容についてはほぼ信用できるものと考えている。（由井常彦）

團 琢磨……安政五年（一八五八）、福岡藩士神屋宅之丞・やすの四男に生まれる。明治三年、福岡藩権大参事團尚静の養子

となる。翌年、福岡藩留学生として岩倉大使一行と同船して渡米した。ボストンの中学を経て、マサチューセッツ工科大学

に入り鉱山学を修め、明治二十一年に帰国。大阪専門学校や東京大学で教鞭をとったのち、明治二十七年工部省に出仕、三池鉱山局に赴任した。明治二十二年、三池炭礦は三井に払い下げとなるが、益田孝の要請により、團は三井組の組織した三池炭礦社で三池炭礦事務長に就任した。デーヴィ・ポンプの導入など三池の近代化に尽力、明治二十六年に三井鉱山合名会社が設立されると、翌年には同社の専務理事（専務取締役）に就任、名実ともに三井鉱山の最高経営者となった。ついで大正三年には三井合名会社理事長に就任し、益田の後継者として三井財閥を統括した。そのほか日本工業倶楽部（大正六年設立）初代理事長、日本経済連盟会（大正十一年設立）会長などを歴任、日本財界のリーダーとなり、昭和三年、男爵を授けられた。昭和恐慌の時代に入り、三井財閥の巨大化は、ドル買い事件もあり、世論の批判を浴び、右翼からは標的とされ、昭和七年（一九三二）三月五日、三井本館玄関前で血盟団員菱沼五郎の凶弾に倒れた。享年七五歳（数え年）。

團 伊玖磨……大正一三年（一九二四）、東京生まれ。作曲家、指揮者。團琢磨の孫、琢磨の長男伊能の長男。東京音楽学校（現・東京芸術大学）卒業。昭和二五年、「交響曲第一番イ調」がNHK管弦楽懸賞で特賞を受け脚光を浴びる。交響曲から「夕鶴」などのオペラ、「筑後川」などの合唱曲、「そうさん」などの童謡に至る幅広い作品を残した。また、随筆集「パイプのけむり」シリーズを始め著述も多い。日本芸術院会員（昭和四八年）、文化功労者（平成十一年）。平成十三年（二〇〇一）五月一七日、出張先の中国にて心不全のため他界。享年七七歳。

平成一一年一月一日

於 三田 綱町三井倶楽部

聞き手 由井 常彦

上條 雅通

吉田えり子

同席者 團 紀彦

西尾 桂子

由井 この度は文化功労者のご受賞、まことにおめでと
うございました。

團 有りがとうございます。これで私も、團家の名を汚
さずに済んだということになりましたかな(笑)。私
も、父(伊能)も、祖父とは違って、絵とか音楽の方
にいつてしまいましたから。

こちら(紀彦氏を指す)は建築家なんです。父
(伊能)が絵の方で、叔父の勝磨が動物学、そして伊
能の孫の紀彦が建築家になって、祖父(琢磨)は今頃
びっくりしているのではないかな(笑)。もともと祖
父は、息子や孫たちが三井に入ることを望んでいなか
った。いつも自分の途は自分で選べといっていました

から、そのとおりになったともいえます。

由井 私どもからみますと、紀彦さんもお祖父さんにと
も似ておられますね。皆さんやはり團家の血筋は争え
ませんね。

先日この下の團建築設計事務所の方に伺わせていた
だき、オフィスを拝見したのですが、非常に立派なお
仕事をしておられ、何よりに存じました。私は三井文
庫の方はまだ就任したばかりの新米で、三井御一族の
ことも詳しく存じませんが、次の八郎右衛門さんにな
られる方も、建築がご専門だそうですね。

團(紀彦) そうです。三井永乗さんですね。永乗さんは、
しばらく私の事務所におられて、いまはアメリカのニ
ューヨークのコーン・ペダーソン・フォックスという
有名な建築設計事務所に入って勉強しています。とて
もいいセンスを持っています。

吉田 これが出来上がった「男爵團琢磨伝」の復刻本です。
二セットお持ちしました。團の字を略字にしてしまっ
て申し訳ありません。あとで先生は、團という字には
とてもお厳しいとうかがいました。

團 それはいいです。立派な本が出来て有りがとうござ

いました。

由井 これをみても驚きますね。團琢磨さんは、MIT（マサチューセッツ工科大学・ボストン）で明治初年によくこれほどの成績をあげたものですね。この成績表などは現在もMITに残っているそうですね。当時日本人でアメリカやイギリスに留学した人々の成績が、いずれもよかったことが学界で改めて評価されています。

團 そうです。だが当時鉱山学科といっても何人もいなかったですからね。それにその後もMITでは東洋人が多かった。それで、MITは、MITでも、マサチューセッツ・インステイテュート・オブ・トーヨーなんていったそうですね（笑）。

上條 先生の「パイプのけむり」はいつも拝見しています。あれはアサヒグラフが廃刊されるので、前回で終わりになりましたね。今度は新しく別の企画でやることになっていきます。

上條 （CDの「夕鶴」をとり出し）大へん失礼ですけど、サインしていただけませんかでしょうか。同僚に先生のファンがおりまして……。

團 ええどうぞ（万年筆をとり出し、サインをする）。

由井 先程、家内から聞いたんですが、團先生は聖心女子大学の校歌も作曲されたそうですね。

團 そうです。日本女子大もそうです。会社の社歌もそうなんです。トヨタも日産も本田も、自動車会社三社の社歌は、皆私の作曲なんです。ライバルの会社を作ったといったんですが、それでも頼まれましたね（笑）。

由井 先生はシンフォニーからオペラから童謡まで、何でも作られるんですね。「やぎさんゆうびん」なども。

團 そうです。「ぞうさん」がそうです。象の歌は世界でいくつもあるんだそうです。それでも上海の動物園で子供たちが歌っているのは、やはり僕の「ぞうさん」なんです。

由井 つかぬことですが、先生は若い時にだれかの演奏を聞いてインスピレーションをうけて作曲家を志されたということがありましたか。

團 そういうものは全くないです。私は最初から作曲なんです。

私の八丈島の家に来られると、部屋をみて皆びっくりするんです。レコードもオーディオも何もないんですよ。あるものは楽譜ばかりなんです。私はレコードなどはほとんど聞かないんです。楽譜をみるばかりな

んです。

私の家は、この息子（紀彦氏）が設計したんですが、海の方に面して広がっているんです。それに塀に窓が広くあいていて、道路から家のなかが丸見えなんです。僕が何をしているか外から丸見えなんですね。

八丈島は気象の激しいところでね。風がとても激しい。いま向こうの八丈富士の方に雲がかかっていると思うと、すぐにこちらまで曇ってくるんですね。自然はとても厳しい所です。そうした厳しい環境のなかで作曲にかかっているんです。朝から晩まで。

由井 ところでこちらの三井倶楽部にはよくおみえですか。
團 ええ。前にはよく参りました。この処しばらく来ませんでしたが。

由井 三井倶楽部の地所は、明治時代に三井家で買う前に、團琢磨さんのお邸だったとか。最近、三井不動産におられた石田繁之介さんが調べておられますが（石田繁之介『綱町三井倶楽部』中央公論美術出版……編者注）。

團 石田さんには会いました。そうです。祖父がしばらくここに住んでいた筈です。

祖父は何よりも南向きの広々した処が好きでしたね。

若い時にアメリカにいたせいかも知れません。この建物の向う側の庭のところにいたそうです。そのあとで三井さんがこちらをふくめすつかり買い、コンドルに設計を頼んだのじゃないですか。

由井 今日、こんなことをお伺いして失礼と存じますが、一寸ばかりお祖父様の團琢磨さんのことをお聞きして宜しいでしょうか。私は経済史とか経営史とかを研究してきたものですから、どうしても團先生から直接お祖父様のことをお聞きしたいわけなのですが。

團 祖父は私の数え年の九ツの時に死んでしまったのですからね。ごく晩年の時のことしか知りません。子供のときのことで、もちろん事情はよくわかりませんが、しかし、時代の変化というか、非常に深刻な時代で、その時代の雰囲気ということは、子供心でもわかりましたね。世の中が戦争の時代に入ってゆくという重苦しい時代ですね。

由井 当日のことは覚えておられますか。

團 それはよく覚えています。昭和七年の三月五日のことです。まだ少し寒く、青い空が晴れた日でした。僕は小学校の二年生で、青山（青山学院小学校）へ行っていたんですが、ちょうど当日はたまたまする休みの

ようなことで家の二階にいたんです。

由井 その時のお住まいは？

團 原宿の家です。今の原宿の駅の近く、天皇陛下が降り降りする駅のすぐ近いところですよ（渋谷区原宿三三四四……編者注）。

この頃の数日、とくに祖父は多忙でした。リットン調査団が来日し、前日の三月四日も実業家を代表して接待に当たっていました。

当日は三井本館の方で会議があるということで行かなければならなかったんですが、家の方に来客があつて中々出られなかった。そこで三井の方からは江戸英雄さんが当時三井合名の秘書か何かで、何遍も催促の電話をしてきたんですね。三度目の電話があつて、一時一寸前に出たんですね。それで三井本館についてのが一一時二五分。犯人の菱沼五郎は、祖父でなくても大物なら誰でもよかったですね。だから江戸さんは私が三度目の電話をしなければ、祖父はやられないで済んだ。申し訳ないといっていましたね。

それでその時は、日本橋の通りの正面玄関ではなく、三越側の入口でおりて、三井本館に入ろうとしたところをやられたんですね。その時犯人が、身体を押しつけてピストルを撃つたというんですが。その時のうわ

ぎが今もあるんですがね。とても小さいんです。祖父はこんなに小さかったかなと思うんですがね。もちろん綺麗になったものです。

それが一寸不思議なんですが、ピストルの穴の位置が、左胸から貫通した、と本に書いてありますが、それとは場所が違うんですがね。そこはどうもよくわかりません。左利きだったんでしょうかね。

それで間もなく報らせが来た。父は早速仕度して、玄関で車に乗った。その時ももう知っていたんでしょうね。色々な人に会う必要があると思つたのでしよう。玄関から二階の母に向つて名刺をほしいといつた。それで母が、二階の窓から玄関に向つて名刺入れを投げた。それが澄んだ空の中にバラバラになつて、中の名刺が花のようにひらひらと舞い落ちた。落下の舞です。それがアッシリア家の没落、團家没落の象徴の感じがしましたね。

由井

それでその後の報らせはどうでした。お祖母様の態度はどうでした。*金子堅太郎の妹（芳子）さんですね。

*金子堅太郎……一八五三—一九四二 福岡藩の出身。

明治四年渡米、ハーバード大法科卒、伊藤博文のもとで大日本帝国憲法起草に参画。第三次伊藤内閣で農商

務相、第四次伊藤内閣では司法相に就任、のち枢密顧問官となる。

團

それは落ち着いていました。祖母はこの日のあることを知っていたのですかね。じつに落ち着いたものでした。昔の武士の妻ですね。紋付きの着物で身仕度して、お見舞いに来られる人々にきちんと挨拶しましたね。翌日の葬式でもしっかりとしました。

当時の警察は右翼に甘かったんですね。血盟団のテロは皆判決では無期懲役だったんですか。その後恩賜や恩赦で軽くなって（囚獄から）すぐに出ちゃったんですね（昭和一五年一月に出獄……編者注）。

菱沼は水戸の人で、水戸はもともとあいう人が多くいるところですね。出るとすぐ水戸に帰って名前を変えて、戦争中には地元の翼賛会で活動したんですね。それはこちらも知っていた。それで菱沼は人を介して團家の人に会いたいかいってきて、父は会っている筈です。

※菱沼五郎……血盟団のメンバー、「二人一殺」の要人
暗殺計画の狙撃手となった。

由井 これは調べればすぐわかることで、お尋ねするのは失礼なのですが、お父様の團伊能さん（一八九二—

九七三）はすぐに男爵を襲爵されたのでしょうか。

團

そうです。間もなくです。翌年には家督を相続し、男爵も継いで、貴族院議員になりました。

父は、祖父とちがって実業家になる気は全くなかったし、祖父も息子たちを三井に入れる気がなかった。当時のことで、三井関係者では息子たちで三井に入ったものも多かった。

由井

益田孝もそうですね、お子さんの一人、三井物産を受けて、英語の試験で落とされ、益田さんが怒ったという話を何かで見たことがあります。

※益田 孝……一八四八—一九三八 三井物産の最高経営者、三井財閥の最高指導者。

團

祖父はそうでなくて、息子たちを三井に入れる気が全くなかった。

父の伊能は、美術の志望で、東大の文学部の美術科を出て、アメリカやフランスに留学して美術史を専攻した。昭和の初年にはしばらく東大の助教教授になって美術史を教えたりしたんです。

父は祖父があまりに偉かったので反撥する気持ちがあったんですね。全反対のことをするところがあった。原宿の家はベルギー大使の公邸だったところで、そ

れを祖父が手に入れた（明治三十九年のこと、石田繁之介『綱町土地の成立過程と益田孝書簡との関連について』「三井文庫論叢」三三三号……編者注）。原宿の家は、南側が傾斜していてそれは広い地所でした。祖父はそこへ色々工夫して家を建てたり、森を作ったりしていた。それを父は相続すると、次々に切り売ったりしてすね。そのときには広い庭をたてにこう線をひいたりしてどんどん売っちゃったんです。

戦争中も疎開しなかったんです。祖父の集めた色々な絵や道具など貴重なものがあつたんですがね。それが戦争中の、あの四月の上空襲で、焼夷弾がおちて家も皆燃えたんですが、それを庭にいて腰を掛けたまま見ていたんです。父はそういう人でした。戦後地元（福岡地方区……編者注）の人におだてられて立候補し、参議院に出て、次のときには衆議院に出て次点で落ちましてね。しかし所詮政治家には向かなかつた。

由井 もとに戻ってお祖父様のことですが、伊玖磨先生の子供のときの印象では、どんな感じでおられましたか。オート・ミールを食べてました。夜はワイン一杯でしたね。夜は遅かつたし、それ程会つたわけではないんです。

考えてみると、祖父が三井鉱山で思う存分に活躍したのは、明治時代で二十何年かそらなんです。三井合名の理事長になって、工業倶楽部でも理事長になってからの後半生は、責任が重くて、楽しくなかったんじゃないですか。とても緊張する毎日だったのでないですか。

こういうことを聞きましたよ。あの頃（大正一〇年……編者注）に英米実業家訪問団で、祖父が団長でヨーロッパへ行った時も、祖父は何らかの事情があつて全員とは遅れて別に出発し、向こうで合流したんだそうです。その時日本ではじめから水夫の仕度を用意したんだそうです。それで船のなかで祖父がどこかへ行つて見えなくなつた。大さわざになつて皆でどこへ行つたかときがすと、甲板の上のマストにひとり水夫の仕度をして登っていたんだというんですね。ふだんそういうことをしていたかつたんです。

※訪問団は大正一〇年一〇月一五日出発、團は病気で遅れて伊能などとともに一〇月三二日出発、ニューヨークで合流した。

由井 御友人についてはどうでしたか。例えば金子堅太郎さんとか。

團

金子さんはもつとも親しかった。二人でいるときは英語でしゃべっていたそうです。二人とも子供のとときから向うにいたので、その方が良かったんですね。とくに二人で海岸で遊ぶのがとても楽しかったようです。そこで、二人で相談して（今の）葉山の御用邸の場所に別荘を持つということになって、共同で明治何年に買ったんですね。それを明治天皇が知って、金子にあそこに自分も別荘が持ちたいと仰せられた。そこで、祖父たちは一緒に買った場所を陛下に差し上げた。そこで、祖父たちは三浦半島のもつと先の方を探して今の場所を買ったんですね（横須賀市秋谷四五四〇―五〇……編者注）。

由井

金子さんは祖母の兄ですが、そればかりでなく本当に終生の友達だったんですね。
ほかに、後継者でおられた牧田環さんなどはどうでしたか。

※牧田 環……一八七一―一九四三 三井鉱山取締役、
常務取締役を経て、会長。

團

ああ牧田さんは、私の叔母（團琢磨長女・芽枝子……編者注）と結婚して親戚となったし、しょっちゅう家に来ていました。ええ真面目な人でした。父に会うと、美術なんかにこらないうと、もつと実業や経済の

事を勉強しないかというような態度で、父は牧田さんがくると、避けていましたね（笑）。

父は私は歯医者になれといましてね。（笑）ヨーロッパの生活からみて、歯医者になれば生活に困らないと思っただんですね。

でも私どもの系統はむしろ文化芸術の方だったかも知れませんが。勝磨（團琢磨次男）も動物の研究でしたし、父の姉の幸子（明治二一年生）は、子供の時から音楽が好きで、当時の事ですから琴をやったんですが、大へんな能力があったらしい。祖父もとても可愛がったんですね。それが私が子供のとき、昭和三年になくなったんですね。祖父がとても気を落としたことを覚えてます。

團家にはそういう血があっただんでしょうかね。

由井

大へん面白いお話をお聞きしました。三井文庫の方にも團琢磨さん関係の史料は結構ありますね。辞令はひと揃い数十点ありますし、そのほか重役会の記録などあります。ぜひ一度おいでいただいて、紀彦さんも御一緒にごらん下さい。そのとき改めて今のようないい出話をなさって下さいませんか。文庫では皆喜びますし、記録もとっておきたいですから。

團

ええ来年春にもうかがいましょう。

(これらの話のあと、團氏の八丈島の庭の先の海岸に、数年前に中国からの船が難破し、大勢の中国人が飢餓状態であったので、食事を与えるなど救助したこと、西尾氏が国際交流に尽力していることなど数々の興味深い話をお聞きしたが、ここでは記載を省略した)。